

1列王記12-14章 「王国分裂」

1A ヤロブアムの即位 12

1B 民衆の不満 1-15

2B 主による制御 16-24

3B 霊的打算 25-33

2A 主の警告 13

1B 神の人 1-10

2B 偽預言者 11-32

3B 続けた悪い道 33-34

3A 主の裁き 14

1B 変装による接近 1-5

2B ヤロブアム家の破滅 6-20

3B 奪い取られる富 21-31

本文

列王記第一 12章を開いてください。12章から14章までを学んでみたいですが、ソロモン死後のイスラエルとユダの歴史をこれから辿っていきます。

1A ヤロブアムの即位 12

1B 民衆の不満 1-15

12:1 レハブアムはシェケムへ行った。全イスラエルが彼を王とするため、シェケムに来ていたからである。

ソロモンの子レハブアムが王となります。ここで強調されているのは、「全イスラエルが彼を王とするため」とあることです。都はエルサレムにあるのですが、レハブアムはシェケムにきています。シェケムは地理的に全イスラエルの真ん中に位置しています。それだけでなく、霊的な中心地です。シェケムと言えば、アブラハムがカナンの地に初めて入ってきたところで、主からこの地を与えると約束されたところです。ヤコブが一時滞在したところです。そして、ヨシュアがエリコとアイを陥落させた後に、シェケムにあるエバル山とゲリジム山でモーセの律法を読み上げました。ですから、レハブアムはここに敢えて来て、ユダのみならず他のイスラエルの部族にとっても王であることを宣言しようとしていました。

12:2 ネバテの子ヤロブアムが、そのことを聞いたころは、ヤロブアムはソロモン王の顔を避けてのがれ、まだエジプトにおり、エジプトに住んでいた。

ソロモンは晩年になって、結婚した外国人の女たちの神々を自らも拝むようになって、それで主が反逆者を起こされました。エドム人のハダデ、アラム(シリア)人のレゾン、そしてソロモン王朝の中でヤロブアムがいました。彼は手腕家でありソロモンも重用したのですが、彼の名の意味は「民が偉大になるように」というものでした。その名前が表しているように、彼は民の人気を集める者でした。その彼にアヒヤという預言者が、「神がソロモンから国を引き裂き、あなたにイスラエル部族の十を与える。」と伝えました。ヤロブアムは、人々がソロモンから心が少しずつ離れているのを知ったので、ソロモンの意向に聞き従わない動きを見せたようです。それでソロモンが彼を殺そうとしましたが、彼はエジプトに亡命しました。しかし、ソロモンが死んだことを彼は聞きました。

12:3 人々は使いをやって、彼を呼び寄せた。それで、ヤロブアムはイスラエルの全集団とともにやって来て、レハブアムに言った。12:4 「あなたの父上は、私たちのくびきをかたくしました。今、あなたは、父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびきを軽くしてください。そうすれば、私たちはあなたに仕えましょう。」

ソロモンが行なった事業がとてつもなく規模が大きかったことは、私たちはすでに読みました。そして宮廷の運営、また軍事費用も莫大なものでした。それに対する徴税を、ユダ族を除くイスラエルに課していたのを覚えているでしょうか？十二の守護をイスラエルにソロモンは置きましたが、ユダは徴税対象外だったのです。この不公平感をイスラエルの民は持っていました。

そして思い出してください、以前より北のイスラエルと南のユダはどちらが強くなるか、競争していました。サウルが死んでから、イスラエルはサウルの子イシュ・ボシェテに付き、ユダはダビデに付きました。そしてダビデの平和を求める姿勢と、知恵によって、何とかイスラエルの人々もダビデを王として立てるようになりました。けれども、ダビデがアブシャロムの反逆を鎮圧した後、ユダとイスラエルの間で激しい口論がありました。その対立を利用して、シェバがイスラエルには分け前がないのだと言いふらして、ダビデからイスラエルを引き離しました。すでに分裂しかねない要素は存在していたのです。ですから、知恵が必要でした。

12:5 すると、彼はこの人々に、「行って、もう三日したら私のところに戻って来なさい。」と言った。そこで、民は出て行った。12:6 レハブアム王は、父ソロモンが活着している間ソロモンに仕えていた長老たちに相談して、「この民にどう答えたらよいと思うか。」と言った。12:7 彼らは王に答えて言った。「きょう、あなたが、この民のしもべとなって彼らに仕え、彼らに答え、彼らに親切なことばをかけてやってくださるなら、彼らはいつまでもあなたのしもべとなるでしょう。」12:8 しかし、彼はこの長老たちの与えた助言を退け、彼とともに育ち、彼に仕えている若者たちに相談して、12:9 彼らに言った。「この民に何と返答したらよいと思うか。彼らは私に『あなたの父上が私たちに負わせたくびきを軽くしてください。』と言って来たのだが。」12:10 彼とともに育った若者たちは答えて言った。「『あなたの父上は私たちのくびきを重くした。だから、あなたは、それを私たちの肩から、軽くしてください。』と言ってあなたに申し出たこの民に、こう答えたらいいでしょう。あなたは彼らにこ

う言ってやりなさい。『私の小指は父の腰よりも太い。12:11 私の父はおまえたちに重いくびきを負わせたが、私はおまえたちのくびきをもっと重くしよう。私の父はおまえたちをむちで懲らしめたが、私はさそりでおまえたちを懲らしめよう。』と。」

レハブアムのこの判断は、かつてのソロモンのように知恵が非常に必要なことでした。若いソロモンは主に、「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、このおびたしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。(1列王3:9)」と祈りましたが、自分の決断によって国全体が分解しえるし、あるいは平和と繁栄に向かうことができます。しかしこの彼の決断を見ると、その知恵が欠けていました。

ここでの対比は、「ソロモンに仕えていた長老たち」と「レハブアムと共に育った若者たち」であります。若者と言ってもすでに三十代、四十代になっていたことでしょう。長老たちは本当に七十代、八十代だったのではないのでしょうか？国を治めることは、人々の心を知ることです。ソロモンがかつて、二人の遊女の争いを治めるために、母性本能を試したのを覚えているのでしょうか？人の心の深いところを知る必要があるわけです。

そこで長老たちは、ソロモンの晩年の統治によって人々の心が離れていっているのを見ました。そこで、ここでは低姿勢で臨まなければいけないことを助言しました。若者たちは周りが見えていません。国を統治するための原則論しか話していません。このような反逆の動きに対しては、強く臨まなければ付け上がるに違いない。したがって、見せしめとして重税を課すことによって、反逆の意気を削がなければいけないと判断しました。しかし、レハブアムは若者にありがちな性急な動きを取ってしまいました。

ここにあるのは、若者と長老の関係です。使徒ペテロがこう話しています。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(1ペテロ 5:5)」ここで言っている長老とは、霊的な年数を経ている成熟な人たちのことです。そしてもちろん身体の年齢もそれに従って増えていることでしょう。そして、「若者」というのは身体的な若さもありますが、それ以上に霊的な年数が若いことを示しています。若者は、「自分で出来る」「自分がやりたい」と思う特徴があります。それが若さの良さでもありますが、長老の霊的経験に基づく助言や指導には耳を傾けなければいけません。

12:12 ヤロブアムと、すべての民は、三日目にレハブアムのところに来た。王が、「三日目に私のところに戻って来なさい。」と言って命じたからである。12:13 王は荒々しく民に答え、長老たちが彼に与えた助言を退け、12:14 若者たちの助言どおり、彼らに答えてこう言った。「私の父はお前たちのくびきを重くしたが、私はお前たちのくびきをもっと重くしよう。父はおまえたちをむちで懲らしめたが、私はさそりでおまえたちを懲らしめよう。」12:15 王は民の願いを聞き入れなかった。それは、主がかつてシロ人アヒヤを通してネバテの子ヤロブアムに告げられた約束を実現するため

に、主がそうしむけられたからである。

この箇所は、主がこのような、レハブアムによる荒々しい態度を起こさせたという意味ではありません。レハブアムが荒々しい態度を取る選択をしたのです。しかし、初めからレハブアムがこのような態度を取ることを知っておられた主が、積極的にこの選択によって王国を分裂させることを意図しておられました。主は悪に対して主権を持っておられるという真理を知ることは大切です。悪をもご自分の栄光のために、特に裁きを行なわれるときに用いられます。

2B 主による制御 16-24

12:16 全イスラエルは、王が自分たちに耳を貸さないのを見て取った。民は王に答えて言った。「ダビデには、われわれへのどんな割り当て地があろう。エッサイの子には、ゆずりの地がない。イスラエルよ。あなたの天幕に帰れ。ダビデよ。今、あなたの家を見よ。」こうして、イスラエルは自分たちの天幕へ帰って行った。12:17 しかし、ユダの町々に住んでいるイスラエル人は、レハブアムがその王であった。

かつてシムイが、ダビデがエルサレムに戻るときに起こったユダとイスラエルの確執を利用して、イスラエルをユダから離反させたときに、まさにこの言葉を使っていました。あの時は数日でその分裂を抑えることができましたが、ここでは決定的なものとなってしまいました。

12:18 レハブアム王は役務長官アドラムを遣わしたが、全イスラエルは、彼を石で打ち殺した。それで、レハブアム王は、ようやくの思いで戦車に乗り込み、エルサレムに逃げた。

役務長官アドラムは、4章6節に出てくる役務長官アドニラムと同じ人物です。この人物こそが、イスラエルの最も嫌う、徴税や徴用を執行していた張本人でした。レハブアムは強権でイスラエルを押しさえつけなければいけないと思っていたのですが、まだその反目の深刻さに気づいていなかったのです。

12:19 このようにして、イスラエルはダビデの家にそむいた。今日もそうである。12:20 全イスラエルは、ヤロブアムが戻って来たことを聞き、人をやって彼を会衆のところに招き、彼を全イスラエルの王とした。ユダの部族以外には、ダビデの家に従うものはなかった。

ヤロブアムは、上手に人々を自分自身に引きつけて、自然な形で民から王に任命されました。

12:21 レハブアムはエルサレムに帰り、ユダの全家とベニヤミンの部族から選抜戦闘員十八万を召集し、王位をソロモンの子レハブアムのもとに取り戻すため、イスラエルの家と戦おうとした。

ベニヤミン族はユダ族と一対になっていました。ですから、南ユダ国にはベニヤミン族もその中

に入っていました。

12:22 すると、神の人シェマヤに次のような神のことばがあった。12:23 「ユダの王、ソロモンの子レハブアム、ユダとベニヤミンの全家、および、そのほかの民に告げて言え。12:24 『主はこう仰せられる。上って行ってはならない。あなたがたの兄弟であるイスラエル人と戦ってはならない。おのおの自分の家に帰れ。わたしがこうなるようにしむけたのだから。』」そこで、彼らは主のことばに聞き従い、主のことばのとおりに戻って行った。

レハブアムは、善い王か悪い王かの分類をすれば、悪い王になります。けれども、歴代誌にある彼の業績もいっしょに読みますと、彼はこのようにへりくだったことが一度ではありませんでした。主が起こされていることなのだから、自分がそれに対して争ってはいけなと良い意味で諦めました。このように、いつまでも悪い意味での人間的な正義感をもって戦うのではなく、主の御手の中に委ねるときに、主は憐れんでくださり、状況が悪くなるのを阻んでくださいます。

こうして、イスラエルが二つの国になってしまいました。預言書を読んでいきますと、この二つが一つになるという希望が語られています(例:エゼキエル 37:15-22)。主が到来されるときに、すなわちイエス・キリストが再臨されるときに、それが実現します。私たちの間でも、キリストにあって一つになるというのは神の御心であり、平和の絆で結ばれていることを神は望んでおられます。

3B 霊的打算 25-33

12:25 ヤロブアムはエフライムの山地にシェケムを再建し、そこに住んだ。さらに、彼はそこから出て、ペヌエルを再建した。

北イスラエルの都は、どんどん変わっていきます。ユダはもちろんエルサレムに固定されていますが、どこを中心にすればよいかヤロブアムは決められなかったようです。初めは、レハブアムがやって来たシェケムを都にしようとした。けれども、おそらくユダからの攻撃を意識したのでしょうか、シェケムではユダに近すぎると判断したのでしょう。最終的にペヌエルに移りました。ペヌエルは、ヨルダン川の東の山地にあります。実は、ペヌエルに移る前にティルツアにシェケムから移動していたことが、14章 17節を読むとわかります。ですからシェケム、ティルツア、そしてペヌエルと動きました。そしてオムリという王の時にサマリヤに定まりました。

12:26 ヤロブアムは心に思った。「今のままなら、この王国はダビデの家に戻るだろう。12:27 この民が、エルサレムにある主の宮でいけにえをささげるために上って行くことになっていけば、この民の心は、彼らの主君、ユダの王レハブアムに再び帰り、私を殺し、ユダの王レハブアムのもとに戻るだろう。」

主はソロモンに対する裁きとして、レハブアムの知恵の欠けを用いられましたが、それによって

ヤロブアムが正しいとされることでは決してありません。むしろ、12章から14章までの全体を読めば、ヤロブアムがイスラエルの半分を消滅させた張本人であることが分かります。

彼には、主から大きな恵みが与えられていました。神の人アヒヤから、「神があなたにイスラエルの十部族を与える。」と言われていたのです。そして、彼に与えられるその国は、このようになると教えました。11章38節です、「もし、わたしが命じるすべてのことにあなたが聞き従い、わたしの道に歩み、わたしのしもべダビデが行なったように、わたしのおきてと命令とを守って、わたしの見る目になうことを行なうなら、わたしはあなたとともにおり、わたしがダビデのために建てたように、長く続く家をあなたのために建て、イスラエルをあなたに与えよう。」ダビデのように、主の命令を守り行なうならば、長く家が建てられるのです。したがって、ヤロブアムが信頼すべきは、主ご自身であり、彼の家は彼自身が主の掟に従って生きることにかかっていたのです。

ところがヤロブアムは、政治家として、言い換えれば世を渡り歩く人としては極めて優れた人物ですが、主に対するこのような信頼が皆無だったのです。政治的な思惑しか考えていませんでした。エルサレムはユダの国にあるから、エルサレムに彼らが礼拝に行ってしまうと、彼らがレハブアムになびいてしまうと考えたのです。人間的にはその通りでしょう、しかし、ヤロブアムが忘れていたのは自分の王国は、神によって立てられたものということです。

12:28 そこで、王は相談して、金の子牛を二つ造り、彼らに言った。「もう、エルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上ったあなたの神々がおられる。」12:29 それから、彼は一つをベテルに据え、一つをダンに安置した。12:30 このことは罪となった。民はこの一つを礼拝するためダンにまで行った。

ヤロブアムのこの言葉は、まさに出エジプト記に出てくる、金の子牛事件と同じです。アロンが民に対して、「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ。」と言った。(32:4)」と言いました。

12:31 それから、彼は高き所の宮を建て、レビの子孫でない一般の民の中から祭司を任命した。12:32 そのうえ、ヤロブアムはユダでの祭りにならって、祭りの日を第八の月の十五日と定め、祭壇でいけにえをささげた。こうして彼は、ベテルで自分が造った子牛にいけにえをささげた。また、彼が任命した高き所の祭司たちをベテルに常住させた。12:33 彼は自分で勝手に考え出した月である第八の月の十五日に、ベテルに造った祭壇でいけにえをささげ、イスラエル人のために祭りの日を定め、祭壇でいけにえをささげ、香をたいた。

ヤロブアムは、偶像礼拝を民に行っただけではありません。他に二つのことを自分勝手に行いました。一つは、祭司を勝手に選びました。もう一つは、祭りの期日です。これはおそらく仮庵の祭りが第七の月の十五日に行われるので、それを模倣したものでしょう。ちなみに、歴代誌を見ます

と北イスラエルにいたレビ人たちは、ヤロブアムのこの宗教政策に反発し、自分たちの町と放牧地を捨てて、ユダに移ってきたことが書かれています(2歴代 11:13-15)。

レビ人ではない人を祭司にするというのは、どういう意味を持つのでしょうか？それは、神の選びと任命のない者を教師にすることです。アロンの子孫が祭司にされるのは、彼らを選んだからではなく、神が選び出されたからです。神の選びと召命がなければ、その人は祭司の務めを行なうことができません。そして御霊の賜物が与えられていなければ、その働きをいくら模倣しようともできないし、模倣したらヤロブアムのように勝手な祭司制度を作ってしまう。そして神の共同体を引き裂くのです。

ヤロブアムが行なったことは、パウロが終わりの時代に起こることとして預言したことと同じです。「というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。(2テモテ 4:3-4)」ですから私たち教会も一人一人がこのことを問われるべきです。自分が神から何を命じられているのか？自分が行なっていることが、神に命じられているから行っているのか、それとも自分が思っていること、願っていることを行なっているのか？このことを吟味する必要があります。

2A 主の警告 13

こうして北イスラエルの骨組みが出来てしまいました。ちょうど一番上のボタンを掛け間違えると、その下のボタンもすべて掛け違えるように、ヤロブアムがこのような犠牲の制度を作り上げてしまったので、北イスラエルの代々の王はヤロブアムにならって悪を行っていきます。そして、ついに北イスラエルが紀元前 722 年にアッシリヤによって滅びます。バアル信仰を粉砕するために用いられたエフーという男でさえ、列王記第二 10 章 29 節によると「**ヤロブアムの罪、すなわち、ベテルとダンにあった金の子牛に仕えることをやめようとはしなかった。**」とあります。その一方で南ユダは、「**父祖ダビデが行なったように、主の目にかなうことを行なった。(例: 2列王 18:3)**」というように、ダビデを基点としてその王がどのようにふるまったかを教えています。

初めの人がどうだったのかで全てが変わりますね。全人類には、二人の頭があります。アダムとキリストです。アダムが罪を犯したので、私たちはその罪から脱却できず、罪の下にいます。けれども、キリストの義の行ないによって、キリストを信じる者は義と認められ、いのちにあって支配することができるようになりました。私たちは肉体にあってアダムの子ですが、けれども霊はキリストにあって神の子になっています。そして将来、そのからだもキリストの似姿に変えられる希望があります。ユダの王がダビデにならったように、私たちもキリストにつながっていることを信仰によって受け入れることによって、罪から解放されるのです。

それでは 13 章に入りますが、北イスラエルは神を王とする、神を証する国ではなく、単なる人

間の国に為り果ててしまいます。しかし、それに対して、NOを突きつけるのが預言者です。この列王記の時代に、エリヤを始めする預言者を主が数多く遣わされます。そしてイザヤ書から始まる預言書は、その多くが列王記の時代に語られたものです。

1B 神の人 1-10

13:1 ひとりの神の人が、主の命令によって、ユダからベテルにやって来た。ちょうどそのとき、ヤロブアムは香をたくために祭壇のそばに立っていた。13:2 すると、この人は、主の命令によって祭壇に向かい、これに呼ばわって言った。「祭壇よ。祭壇よ。主はこう仰せられる。『見よ。ひとりの男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちをいけにえとしておまえの上にささげ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』」

主は、340年後に起こすことをヤロブアムに宣告されました。驚くべき預言です、それだけ先のことを名前まで告げて伝えておられるのです。「なお彼は、ベテルにある祭壇と、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの造った高き所、すなわち、その祭壇も高き所もこわした。高き所を焼き、粉々に砕いて灰にし、アシェラ像を焼いた。ヨシヤが向き直ると、山の中に墓があるのが見えた。そこで彼は人をやってその墓から骨を取り出し、それを祭壇の上で焼き、祭壇を汚れたものとした。かつて、神の人がこのことを預言して呼ばわった主のことばのとおりであった。(2列王 23:15-16)」

そして、彼はユダからやって来た神の人です。後で出てきますが、北イスラエルには預言者はいたのですが、ヤロブアムについての神の言葉を告げる勇氣を持っていなかったか、自分自身が生ぬるくなっていたのだと思われます。それでユダから主が遣わされたのです。

13:3 その日、彼は次のように言って一つのしるしを与えた。「これが、主の告げられたしるしである。見よ。祭壇は裂け、その上の灰はこぼれ出る。」

はるか先の預言ですから、ヤロブアムがその確かさを知る由もありません。そこで、主が確かさを与えるためにしるしを与えられます。祭壇の上にある灰は、動物のいけにえの脂と交じり合っ、宗教的に意味のあるものだそうです。それが零れ落ちる事は、神の異教の儀式に対する裁きであります。

13:4 ヤロブアム王は、ベテルの祭壇に向かって叫んでいる神の人のことばを聞いたとき、祭壇から手を伸ばして、「彼を捕えよ。」と言った。すると、彼に向けて伸ばした手はしなび、戻すことができなくなった。13:5 神の人が主のことばによって与えたしるしのとおり、祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出た。13:6 そこで、王はこの神の人に向かって言った。「どうか、あなたの神、主にお願いをして、私のために祈ってください。そうすれば、私の手はもとに戻るでしょう。」神の人が主に願ったので、王の手はもとに戻り、前と同じようになった。

午前礼拝で話した「コンビニ礼拝」であります。ヤロブアムの宗教観がそういうものでした。自分の言うことを聞かない、自分の言うなりにならない神の言葉に対してはひどく反発します。迫害します。しかし、自分の手がしなびる、自分が弱められたのであれば、その迫害しようとした預言者の神に、助けを頼むのです。助けだけを頼む、けれども自分は絶対に変えません、という態度です。

13:7 王は神の人に言った。「私といっしょに家に来て、食事をして元気をつけてください。あなたに贈り物をしたい。」13:8 すると、神の人は王に言った。「たとい、あなたの家の半分を私に下さっても、あなたといっしょにまいりません。また、この所ではパンを食べず、水も飲みません。13:9 主の命令によって、『パンを食べてはならない。水も飲んでではない。また、もと来た道を通って帰ってはならない。』と命じられているからです。13:10 こうして、彼はベテルに来たときの道は通らず、ほかの道を通って帰った。

主は、この神の人に、北イスラエルにおいては決して寄り道してならないと指示しておりました。おそらく北イスラエルの土地そのものがこの偶像で汚されているということを示すためであったのでしょう。この誘惑には、神の人には一切、引っかかることはありませんでした。

2B 偽預言者 11-32

しかし、次の出来事は私たちに大きな教訓を与えます。俗的なヤロブアムの誘いは、簡単に断ることが出来ます。けれども、同業の、しかも自分よりも経験のある預言者からの誘いには、彼は折れてしまったのです。

13:11 ひとりの年寄りの預言者がベテルに住んでいた。その息子たちが来て、その日、ベテルで神の人がしたことを残らず彼に話した。また、この人が王に告げたことばも父に話した。13:12 すると父は、「その人はどの道を行ったか。」と彼らに尋ねた。息子たちはユダから来た神の人の帰って行った道を知っていた。

真っ向から神に反抗している北イスラエルを阻むために、この老人は預言者として何も言わずにじっとしていました。ところがユダから、神の言葉を伝える人が来たことを知りました。それでこの老人はたいそう感動したのです。

13:13 父は息子たちに、「ろばに鞍を置いてくれ。」と言った。彼らがろばに鞍を置くと、父はろばに乗り、13:14 神の人のあとを追って行った。その人が櫛の木の下にすわっているのを見つけると、「あなたがユダからおいでになった神の人ですか。」と尋ねた。その人は、「私です。」と答えた。13:15 彼はその人に、「私といっしょに家に来て、パンを食べてください。」と言った。13:16 するとその人は、「私はあなたといっしょに引き返し、あなたといっしょに行くことはできません。この所では、あなたといっしょにパンも食べず、水も飲みません。13:17 というのは、私は主の命令によ

て、『そこではパンを食べてはならない。水も飲んでではない。もと来た道を通って帰ってはならない。』と命じられているからです。」13:18 彼はその人に言った。「私もあなたと同じく預言者です。御使いが主の命令を受けて、私に『その人をあなたの家に連れ帰り、パンを食べさせ、水を飲ませよ。』と言って命じました。」こうしてその人をだました。13:19 そこで、その人は彼といっしょに帰り、彼の家でパンを食べ、水を飲んだ。

彼は嘘を付きました。ただ単純に、この神の人を自分の家に招きたかっただけなのです。その願いを主の名によって、主が語ったものとして語ったのです。20 節以降に、彼は真の預言を行いません。彼は、実際に預言の賜物が与えられている人でした。しかし、自分の利得を求めたバラムのように、自分の願いを優先し、しかもそれを神の名によって語ったのです。これから列王記においても、真っ向から王に対峙する預言者がいるのですが、大勢の王の気持ちを喜ばせる預言を行なう偽預言者たちが出てきます。預言者は、王と対峙しなければいけないことが多かったですが、それ以外に、偽預言者との対決があったのです。

13:20 彼らが食卓についていたとき、その人を連れ戻した預言者に、主のことばがあったので、13:21 彼はユダから来た神の人に叫んで言った。「主はこう仰せられる。『あなたは主のことばにそむき、あなたの神、主が命じられた命令を守らず、13:22 主があなたに、パンを食べてはならない、水も飲んでではない、と命じられた場所に引き返して、そこであなたはパンを食べ、水を飲んだので、あなたのなきがらは、あなたの先祖の墓には、はいらない。』」

いま話したように、彼は預言の賜物がありました。だから、主がつい先ほど、偽預言を行なったにも関わらず、神の命令に聞き従わなかったこの若者に対して裁きを告げるために、同じ老人を用いられたのです。イスラエルをつまづかせたあのバラムは、イスラエルについて他の預言者以上に、美しい預言を、そしてキリストが到来する預言まで行ないました。

こういうことは可能なのです。いつもは主の言葉を告げている者が、主の言葉を捻じ曲げること、偽りの教えを同じ口から放つことは可能なのです。間違った教えについて、これは間違いであることをはっきり言うと、「あの先生は福音をしっかりと伝えている。そんなことを言うてはいけない。」と言う人たちが多くいます。神の言葉ではなくて、その伝えている人に信頼してしまっているから、そのようになってしまうのです。真理の言葉を告げているものが、神の名によって偽りを告げることが可能なのです。だから、語られる説教の言葉はそれを決してないがしろにしてはならないのと同時に、何が良いかをいつも見分けていくという霊的鍛錬が必要です。「預言をないがしろにはいけません。すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。(2テサロニケ 5:20-21)」

南ユダの末期にエレミヤという預言者が、偽預言者と対立しました。主がエレミヤに彼らについて言われた言葉はこうです。「わたしは彼らを遣わさなかったのに、..主の御告げ..彼らは、わ

たしの名によって偽りを預言している。(27:15)」預言の賜物が与えられている者、あるいは神の御言葉を任せられている者が、自分の願望、自分の欲望、自分の考えを優先させるのではあれば、物の見事に偽預言者になることができます。

使徒たちも、偽使徒や偽教師といつも対峙していました。そこでパウロは自分が御言葉を語るとき姿勢を、自分でも確認するかのようにその心のうちを手紙の中で語っています。例えば、テサロニケ第一 2 章 3-5 節です。「私たちの勧めは、迷いや不純な心から出ているものではなく、だましごとでもありません。私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。」いかがでしょうか、人を喜ばせるために、その人の願望どおりの助言をクリスチャンとしてしませんか？それを「励まし」という言葉で言い表すことがありますか？罪を犯している人に、「大丈夫ですよ」とそれを是認するような言葉を語りかけませんか？これも小さな意味で偽預言であります。

御言葉を語るというのは勇気の要ることあります。私はしばしば、「清正さんは、御言葉を語っている時に楽しんでますね。」と言われる。確かに楽しいです。しかし、どうか、これを趣味の範疇のように考えないでください。非常に緊張した作業であり、魂に疲れをもたらします。なぜならば、自分の願望、自分の感情、自分の思考では、全く反対のことを神が告げていることを知っているからです。でも、もし私が自分の願っていることを語ったら、あまりにも恐ろしい、神からの裁きがあると思うからです。そして聖書教師だけがこの務めを受けているのではなく、キリスト者であればだれでも、福音の言葉を神から預かっています。その時は一人一人が預言者であり、キリストの愛に駆り立てられて、愛によって真理を語るのですが、愛しているからこそ、まっすぐな、混じりけのない言葉を語るのです。

13:23 彼はパンを食べ、水を飲んで後、彼が連れ帰った預言者のために、ろばに鞍を置いた。
13:24 その人が出て行くと、獅子が道でその人に会い、その人を殺した。死体は道に投げ出され、ろばはそのそばに立っていた。獅子も死体のそばに立っていた。13:25 そこを、人々が通りかかり、道に投げ出されている死体と、その死体のそばに立っている獅子を見た。彼らはあの年寄りの預言者の住んでいる町に行き、このことを話した。13:26 その人を途中から連れ帰ったあの預言者は、それを聞いて言った。「それは、主のことばにそむいた神の人だ。主が彼に告げたことばどおりに、主が彼を獅子に渡し、獅子が彼を裂いて殺したのだ。」

この年寄り預言者は、神を恐れませんでした。神が告げられたとおりに、この人が死んでしまったことを恐れたのです。預言者が馴れ合いになることができないのだ、ということも学んだのでしょう。同僚の預言者からさえ、称賛や見返りを求めはいけないという務めの厳しさがあります。

13:27 そして息子たちに、「ろばに鞍を置いてくれ。」と言ったので、彼らは鞍を置いた。13:28 彼は出かけて行って、道に投げ出されている死体と、その死体のそばに立っているろばと獅子とを見つけた。獅子はその死体を食わず、ろばを裂き殺してもいなかった。13:29 そこで、預言者は、神の人の死体を取り上げ、それをろばに乗せてこの年寄りの預言者の町に持ち帰り、いたみ悲しんで、葬った。13:30 彼がなきがらを自分の墓に納めると、みなはその人のために、「ああ、わが兄弟。」と言って、いたみ悲しんだ。13:31 彼はその人を葬って後、息子たちに言った。「私が死んだら、あの神の人を葬った墓に私を葬り、あの人の骨のそばに私の骨を納めてくれ。13:32 あの人が主の命令によって、ベテルにある祭壇と、サマリヤの町々にあるすべての高き所の宮とに向かって呼ばわったことばは、必ず成就するからだ。」

主は、獅子に対して、神の人の死体をそれ以上痛めつけないように制しておられました。彼が行なった預言のゆえに、彼は尊ばれるべきでした。そしてこの老人も、この預言の尊さを知って、自分もこの預言を信じて死んだということを証しするために、この神の人と同じところに納骨してほしいと息子に言っています。

偽預言について、私たちはそれがこれだけの悲劇をもたらすことを知る必要があるでしょう。多くの人が、「たかが、これだけの違いでは？」と言います。いいえ、「たかが、されど」であります。

以前、中国で逮捕されて、韓国に収監している”摂理”の創始者がいます。彼は女性信徒に性的嫌がらせをしました。そのことは置いて、彼も、また彼の昔属していた統一協会も、予定論という講義を持っています。そして、こう教えるのです。「神と人の責任分担は、神は 95 パーセントで、人は 5 パーセントである。」どうでしょうか？もっともらしく聞こえますね？でも、これは異端の教えです。神の主権は100%なのです。そして人の責任も、その人の選択により、永遠のいのちと永遠の裁きが定められるのですから、100%なのです。

そうすると、「それでは理解できない！」という反論がきます。はい、理解できないのです。だから、自分の思いと反対のことを告げなければいけないのです。もし仮に、その神の主権が100%ではなく95%だとしてみましょう。どうなるかご存知ですか？神の主権は95%ではなく、0%になります。神に救われるために、自分の行いと努力で100%達成しなければならなくなります。こうした異端は、信者を奴隷として働かせることができるのです。神の国に入るために、その組織に自分の全財産と魂をつぎ込まなければいけなくなります。

3B 続けた悪い道 33-34

13:33 このことがあって後も、ヤロブアムは悪い道から立ち返ることもせず、引き続いて、一般の民の中から高き所の祭司たちを任命し、だれでも志願する者を任職して高き所の祭司にした。13:34 このことによって、ヤロブアムの家が罪を犯すこととなり、ついには、地の面から根絶やしにされるようになった。

ヤロブアムに対して、主は大きな祝福を約束されました。それに背いた彼に対して、主は神の人を遣わし、戒めさえ与えられました。その腕が癒される経験までしました。その彼が死という大きな対価を支払われたにも関わらず、北イスラエルに彼の墓が出来たにも関わらず、それでも彼は自分のあり方を変えようとはしませんでした。そこで、ヤロブアムの家を根絶やしにすることを神は決められました。

3A 主の裁き 14

1B 変装による接近 1-5

14:1 このころ、ヤロブアムの子アビヤが病気になったので、14:2 ヤロブアムは妻に言った。「さあ、変装して、ヤロブアムの妻だと悟られないようにしてシロへ行ってくれ。そこには、私がこの民の王となることを私に告げた預言者アヒヤがいる。14:3 パン十個と菓子数個、それに、蜜のびんを持って彼のところへ行ってくれ。彼は子どもがどうなるか教えてくれるだろう。」14:4 ヤロブアムの妻は言われたとおりにして、シロへ出かけ、アヒヤの家に行ったが、アヒヤは年をとって目がこわばり、見るができなかった。14:5 しかし、主はアヒヤに言われた。「今、ヤロブアムの妻が子どものことで、あなたに尋ねるために来ている。その子が病気だからだ。あなたはこれこれのことを彼女に告げなければならない。はいつて来るときには、彼女は、ほかの女のようなふりをしている。」

主はなおのこと、ヤロブアムにご自分に立ち戻るよう徴を送ってくださっています。自分の息子の病です。主は、初めは優しく語られるかもしれませんが。けれども人がそれをかなくなに拒むと、神はさらに大きな声を出されます。このような苦しみの時には大声で叫んでおられます。

そしてヤロブアムの行動は奇妙です。まず、自分の拝んでいる祭壇のところには、息子の病について伺いを立てに行くことはありません。それはうまくいかないことを知っているからです。そして、自分に対して神の言葉を告げた同じ預言者アヒヤのところに行きます。アヒヤははっきりと、ダビデのように、主の掟に聞き従うのであれば、長く続く家をヤロブアムに与えると伝えていました。自分が真っ向から反対のことを行なっているにも関わらず、そこに行くのです。それは、助けだけは得たいと思っているからです。神の言葉について選り好みをしているのです。

神は、反逆する者にも憐れみをかけて癒しを行なわれたりします。以前ヤロブアムは自分の萎えた腕を癒してもらいました。その憐れみを「だったら、自分の行いを改めなくても同じように助けが得られる。」と勝手に想像するのです。これは甘えの信仰、またはコンビニ信仰と言ってもよいでしょう。

けれども、自分の素性が明かされないように行きます。同じように、神のところに来るときに自分を変装する人がいます。新約聖書では、例えば、パリサイ人がいます。イエス様に対して質問をしているように見せかけて、実はイエスを試している心が、主ご自身によって明らかにされます。使

徒の働きでは、アナニヤとサツピラは自分が財産の全てを捧げたと偽りました。自分自身がどのような姿であるのか、どのような心であるのかを上手に隠して、それで神の前に出ようとします。

けれども、アヒヤは主から、ヤロブアムの妻であると告げられていました。ごまさせると思っていること自体が、自分自身を欺いているのです。神に知られているし、実は人にも知られていることが多いのです。知っていないのは自分自身だけなのです。

2B ヤロブアム家の破滅 6-20

14:6 アヒヤは戸口にはいつて来る彼女の足音を聞いて言った。「おはいりなさい。ヤロブアムの奥さん。なぜ、ほかの女のようなふりをしているのですか。私はあなたにきびしいことを伝えなければなりません。

ヤロブアムの妻は顔面蒼白になったことでしょう。

14:7 帰って行ってヤロブアムに言いなさい。イスラエルの神、主は、こう仰せられます。『わたしは民の中からあなたを高くあげ、わたしの民イスラエルを治める君主とし、14:8 ダビデの家から王国を引き裂いてあなたに与えた。あなたは、わたしのしもべダビデのようではなかった。ダビデは、わたしの命令を守り、心を尽くしてわたしに従い、ただ、わたしの見る目になかったことだけを行なった。14:9 ところが、あなたはこれまでのだれよりも悪いことをし、行って、自分のためにほかの神々と、鑄物の像を造り、わたしの怒りを引き起こし、わたしをあなたのうしろに捨て去った。14:10 だから、見よ、わたしはヤロブアムの家にわざわいをもたらす。ヤロブアムに属する小わっぱから奴隷や自由の者に至るまで、イスラエルにおいて断ち滅ぼし、糞を残らず焼き去るように、ヤロブアムの家のあとを除き去る。14:11 ヤロブアムに属する者で、町で死ぬ者は犬がこれを食らい、野で死ぬ者は空の鳥がこれを食らう。』主がこう仰せられたのです。

主が意図されていたことは、ソロモンへの裁きでした。それで一時的にユダから国を引き裂くことであり、まさか偶像礼拝王国にするつもりはありませんでした。だからヤロブアムの家を長く続くと約束してくださったのです。そして、ユダの国に対してと同じように、ダビデを例として主に従って歩んでいきなさい、と命じていたのです。

ダビデが完璧ではないことは確かです。けれども、「わたしの命令を守り、心を尽くしてわたしに従い、ただ、わたしの見る目になかったことだけを行なった。」と主は言われています。これは彼の姿勢です。福音を受け入れる姿勢です。罪を犯しても、ちょうど神殿の中に入らずに天に顔を向けることもせずに、「この罪人を憐れんでください」と祈った取税人のようです。彼は義と認められたとありますが、ダビデは罪に対して繊細であり、その罪の責めを重く受け止め、深い悔い改めを行なっていました。これこそが、主の見る目になうことでした。

ところがヤロブアムはどうでしょうか？9節にかなり強い言葉を神は使われています。「わたしをあなたのうしろに捨て去った。」完全に神を捨て去る、嫌悪感を持って捨て、完全に無視するということを行なってしまったのです。そのために、長く続くと主が約束された家は断ち滅ぼされます。

14:12 さあ、家へ帰りなさい。あなたの足が町にはいるとき、あの子は死にます。14:13 イスラエルのすべてがその子のためにいたみ悲しんで葬りましょう。ヤロブアムの家の者で、墓に葬られるのは、彼だけでしょう。ヤロブアムの家で、彼は、イスラエルの神、主の御心になつていたので。14:14 主はご自分のためにイスラエルの上にひとりの王を起こされます。彼は、その日、そしてただちに、ヤロブアムの家を断ち滅ぼします。

主はヤロブアムの家の破滅のしるしとして、その息子の死を告げられました。けれども、彼だけが丁寧に葬られます。私たちは、早死にすることが不幸だと思っははいけないでしょう。早く死ぬことで、むしろ全うな命を送れたとも言えるのです。ヤロブアムのこの息子はそうでした。

そして、ひとりの王を起こされると主は言われますが、ヤロブアムの息子ナダブが統治を始めて二年後に、家臣のバシヤが彼を殺しました。そして王となり、ヤロブアムの全家を打って、ひとりも残らず殺しました(15:29)。このように、北イスラエルは、王朝が変わっていきます。ユダはダビデ王朝ですが、北イスラエルは家臣のクーデターにより、家が断ち滅ぼされるので、変わっていくのです。

14:15 主は、イスラエルを打って、水に揺らぐ葦のようにし、彼らの先祖たちに与えられたこの良い地からイスラエルを引き抜き、ユーフラテス川の向こうに散らされるでしょう。彼らがアシェラ像を造って主の怒りを引き起こしたからです。14:16 ヤロブアムが自分で犯した罪と、彼がイスラエルに犯させた罪のために、主はイスラエルを捨てられるのです。」

これは、ヤロブアムの罪から最後の最後まで離れられない北イスラエルの最後の姿であります。歴代のイスラエルの王が、その罪から離れることがありませんでした。それで、ユーフラテス川の向こうとはアッシリヤのことです。北イスラエルはそこまで捕え移されることとなります。

14:17 ヤロブアムの妻は立ち去って、ティルツアに着いた。彼女が家の敷居に来たとき、その子どもは死んだ。14:18 人々はその子を葬り、全イスラエルは彼のためにいたみ悲しんだ。主がそのしもべ、預言者アヒヤによって語られたことばのとおりであった。14:19 ヤロブアムのその他の業績、彼がいかに戦い、いかに治めたかは、イスラエルの王たちの年代記の書にまさしくしてある。14:20 ヤロブアムが王であった期間は二十二年であった。彼は先祖たちとともに眠り、その子ナダブが代わって王となった。

この言い回しが、これから続きます。それぞれの王について、実績について年代記に記されてい

るという言い回しがあります。ユダの王の年代記については歴代誌がありますが、イスラエルの年代記は出てきていないし、正典の中にもありません。そして彼の死については、歴代誌第二 13 章 20 節に、「主が彼を打たれたので、彼は死んだ。」とあります。自分自身の人生も、アヒヤの預言の通りになりました。

列王記は、北イスラエルの王たちの記録を克明に記しています。そして、ヒゼキヤが王のとき、列王記代に 17 章にあります。北イスラエルが滅びます。17 章には、その理由を長いページに渡って、著者が書き記しています。ヤロブアムの行なったことの罪の重さ、そしてその結果としてのアッシリヤ捕囚というのが列王記の流れです。

3B 奪い取られる富 21-31

そして今度は戻って、レハブアムの人生です。

14:21 ユダではソロモンの子レハブアムが王になっていた。レハブアムは四十一歳で王となり、主がご自分の名を置くためにイスラエルの全部族の中から選ばれた都、エルサレムで十七年間、王であった。彼の母の名はナアマといい、アモン人であった。

レハブアムの母はアモン人でした。ソロモンが、モアブ人、アモン人、エドム人、シドン人の女を愛したとありましたが、アモン人を妻として持っていました。

14:22 ユダの人々は主の目の前に悪を行ない、彼らの先祖たちよりひどい罪を犯して主を怒らせた。14:23 彼らもまた、すべての高い丘の上や青木の下に、高き所や、石の柱や、アシェラ像を立てた。14:24 この国には神殿男娼もいた。彼らは、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の、すべての忌みきらうべきならわしをまねて行っていた。

ユダも同じように、悪の中に入り込んでいました。先祖たちよりもひどい罪を犯した、とありますが、ソロモンがカナン人たちを徴用していて、そのカナン人の慣わしをユダの民も行うようになっていました。

14:25 レハブアム王の第五年に、エジプトの王シシャクがエルサレムに攻め上って来て、14:26 主の宮の財宝、王宮の財宝を奪い取り、何もかも奪って、ソロモンが作った金の盾も全部奪い取った。14:27 それで、レハブアム王は、その代わりに青銅の盾を作り、これを王宮の門を守る近衛兵の隊長の手に託した。14:28 王が主の宮にはいるたびごとに、近衛兵が、これを運んで行き、また、これを近衛兵の控え室に運び帰った。

主が、ユダの民がご自分を見捨てたので、同じようにエジプトの王の手に渡されるようにされました。シシャクは、かつてヤロブアムがエジプトに隠れていたときのパロです。そしてエジプトには、

シシャクの軍事遠征の記録が発見されており、ユダの町々を奪い取ったことも書かれています。

そして、たった一世代でソロモンの築き上げた富がなくなってしまう。レバノンの森にあった金の盾は奪い取ってしまいました。ソロモンは伝道者の書を書いたときに、このことを考えて空しいといったのではないかと思います。「私は、日の下で骨折ったいっさいの労苦を憎んだ。後継者のために残さなければならないからである。後継者が知恵ある者か愚か者か、だれにわかろう。しかも、私が日の下で骨折り、知恵を使ってしたすべての労苦を、その者が支配するようになるのだ。これもまた、むなしい。(伝道者 2:18-19)」主にあつて行なわなかったことは、このように過ぎ去ってしまうのです。

14:29 レハブアムのその他の業績、彼の行なったすべての事、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。14:30 レハブアムとヤロブアムとの間には、いつまでも戦いがあった。14:31 レハブアムは彼の先祖たちとともに眠り、先祖たちとともにダビデの町に葬られた。彼の母の名はナアマといい、アモン人であった。彼の子アビヤムが代わって王となった。

レハブアムとヤロブアムの間の戦いは、またはイスラエルとユダの間は対立の期間が続きました。中期に入って、融和的になっていきます。

レハブアムについては、歴代誌を見ますと高ぶって、それからシシャクが来て、主の前にへりくだったとあります。レハブアムについて言うならば、初めは横暴な振る舞いをしましたが、主に対面してへりくだった人生を歩みました。けれどもヤロブアムは、どうでしょうか？彼は人々を引きつけ、自分を王とさせるというような人気者でした。そして神からも約束が与えられました。けれども、自分の背信をまったく悔い改めることなく、滅んでいった人間です。私たちがどのように、人生の競争を走っているのか、それを確かめる時が必要ですね。